SKYLINE

創刊号

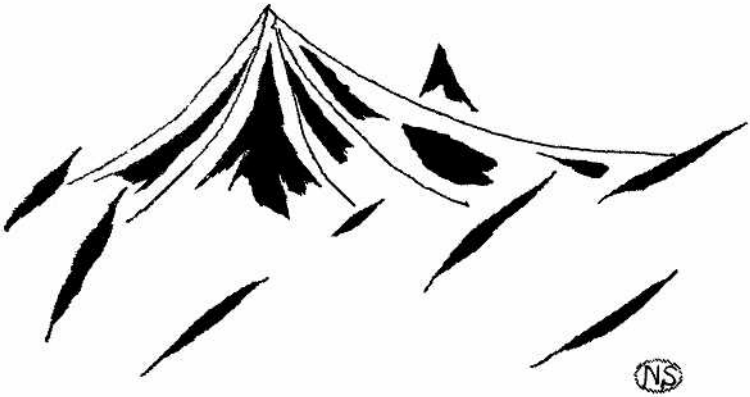
Vol.1No.1　横浜国大ワンダーホーゲル部

標題SKYLINEについて

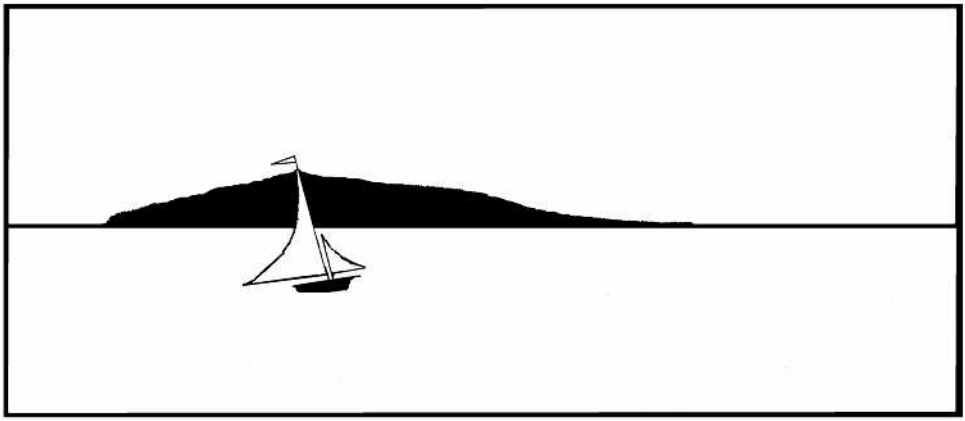
私達の前途にSKYLINEは存在する。高く又遠い究極を秘めて、それは大地のシルエット、青空を切る刃物のイメージ。私達がそれをみつめて、それを目指して進むもの … しかも、しっかりと踏まれた土につづくもの。　　H．K

SKYLINE

Vol.No.1



創刊号



SKYLINE　創刊号

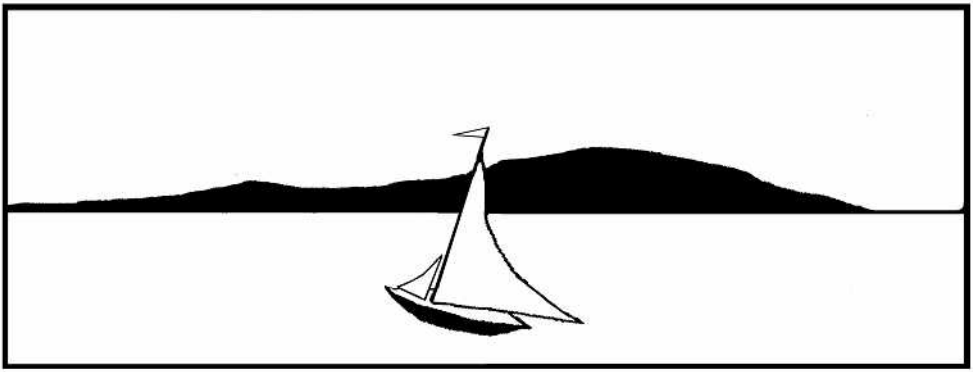
目次

巻頭言　吉田光志　4

創設後の一年をふり返って　堀内　肇　6

かもしか　田上栄一　9

乾徳山黒金山登山紀行　嘉納秀明　望月元雄　松本正雄　田上栄一　石黒暉安　11



あら！　まだ早いわ　佐藤文雄　17
大菩薩峠ハイキング　小野三郎　19
ワンゲル雑感　河野　哲　23
丹沢登山記　小野三郎　25
丹沢主脈縦走記　嘉納秀明　28
３３年度役員名簿　34
原稿募集　35
編集後記　36
表紙　（H・K）
カット　（N・S）

巻頭言

吉田光志

「あゝ、やっとたどりつけた」

私達のワンゲルが、この1年の間に、小規模ながらも、サークルとして、恥ずかしくないものに成長し、しかも、機関誌まで発行できるようになったとき、私は山の頂上にでもたどりついたような気持で一杯になった。

この小雑誌は私達の悩みをうちあける所であり、それを解決しようとする所であり、友情をはぐくむ所であり、自然をたたえる所なのです。私達が、めいめい心の扉をあけて、お互いに訪問し合う所とも云えましょう。更に進んでは、新しいモラル建設の場にしたいと思います。

この創刊号は殆ど、去年の紀行文でうまり、右に述べたような目的にあまりかないませんが、号を追うに従って、所期の目的を達成させようと思います。私はいま、この小雑誌は、また、自然をたたえる所であると云いましたが「俺は自然な

「昨年度ワンゲルの活動」

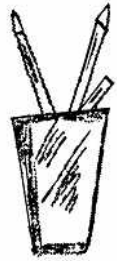
四月　ワンダーフォーゲル創設
六月　大磯ハイキング
七月　箱根ハイキング
八月　北軽井沢キャンプ
九月　丹沢登山
十月　丹沢集中登山
十一月　大菩薩峠ハイキング
四月　伊豆一週旅行

んて認めやしない。」と豪語される人も、大勢の中にはあると思います。しかしその人は間違っていると思います。彼は「自然を知らない。」という簡単な理由で「自然を認めない。」にすぎないからです。野を歩き、山に登ってみれば、自然も生命をもって変動していることに、すぐ、私達は気がつく。私達が愛情をもって、自然に接すれば、自然も愛情をもって私達に見（マミ）えてくれる。どうして「自然を認めない」なんていえようか。私は山や野へ行くと必ず写生をする。鉛筆も紙もいらないスケッチだ。むしろ私がほんとうに紙にかいたりすれば、彼女（自然）は、私の絵を見て、怒り出すか、泣きだすに決っている。だから心の中にスケッチをするのだ。自然の美しさを、一瞬間とらえればそれでいゝのだ。それは巨匠の描いた絵にも匹敵するもの、いやそれ以上のものとして私達の心の中に永遠に残るに違いない。この小雑誌は、私達にとって宝ともいえましょう。いつまでも大事に、大事に育てあげてゆきたいと思います。他校のワンゲルの方や、本学の人達が沢山、助云や忠告をして下されば大変嬉しいことです。

「今年度
ワンゲル
の活動予定」

五月　新入生歓迎
　　ワンダリング
　　機関誌第一号
六月　立野役員選出
七月　北アルプス
八月　機関誌第二号
九月　機関誌第三号
十月　大学祭参加
一月　秩父ワンダリング
二月　機関誌第四号
三月　合宿キャンプ

創設後の一年をふり返って



前部長　堀内　肇

この一年間をふり返ってみて、時にこれといった印象がないのが、なんだか不思議な気がします。それだけ平凡に終わってしまったのかもしれません。

部としての規律も決まっていず、なにか同好会に似ているといった嫌いもなかったわけではないのですが、これも創設したばかりであるとということで、まあ許してもらえると思います。

一度このように部というような組織を作ってしまうと、組織が一人立ちして自らの方向に動きだして行くらしく、私が最初に考えていたよりもずっと早く大規模な、将来性のある部になって来たようです。又それだけに、私が考えていたのと異なった性格を帯びて来た面もあるわけです。

部という以上、そこには規律がなければならないと思います。規律といっても個人の自由にまで干渉しようというのではないことは、云うまでもないことなので云ってみれば、秩序の維持のために必要なのだといえると思います。唯ここで個人の自由ということが、個人のわがままま

な主張になってしまったり、個人の無責任な行動を弁護するための詭弁の手段となったりしては、なんの秩序もなくなってしまうわけです。

というわけで、いい意味での個人の自由ということをはっきりと自覚していることが、部をまとめる等、ひいては部の発展の上にも必要なことだと思うのです。

この規律という点からみると、この一年は私の目にはあまり、好ましかったとは云いがたいように思われます。だからといって規律というものを文字に現すということは、なかなか困難な事であるし、又自然に各自が自覚してゆくということの方が望ましいのではないかと思います。

創設してから一年しか経っていないことと部の性質からして、行事と行事との間が、とかくゆるみがちになるというか、ともかく部活動が空白になりやすいのでこの点は一考を要する所だと思います。

この一年間の個々の行事について、ここで一つ一つ反省してみる余裕はありませんが、全般的にみて、もっと時間的に余裕のある日程を組んだ方がよかったように思われます。

ただ歩くだけではなく、もう少し他に、例えば自然を眺めて考えるといった余裕があってもよいのではないでしょうか。

歩くこと自体に楽しみがあるとおっしゃる人もいるでしょうが、このことはもっともだとしても、これで全部では、あまりに内容の貧弱な旅になってしまいはしないでしょうか。

行く先々で皆でレクレーションを楽しむ事が出来又個人的な興味を満足させる事が出来る時間の余裕をとって置くことも十分に意義深い事だと考えられます。

私達の部が山岳部があるところに新しく設けられたということからして、なにか山岳部と異なった特徴というものを、そこから発見してゆかねばならないと思います。

すなわちワンダーホーゲル部の個性というものを創造してゆくことが必要だと

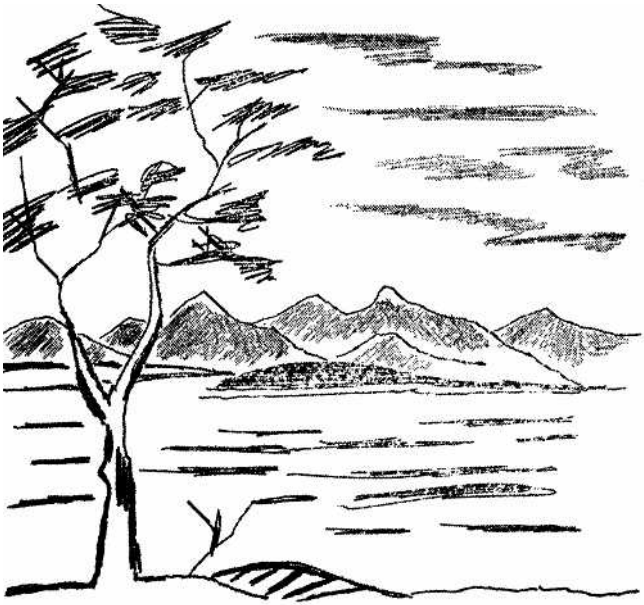
思うにです。これは急に出来ることではなく、又強いて求めようとしても求められるものではありません。いつもこのことを自覚して行動することによって、知らず知らずのうちに、はっきりしてゆくものなのです。

どんな種類のサークルであろうと、結局、各自の欲求を充足するために同じ欲求を抱いた人々が集まって作られるものであって、私達の部にあっては、技術の習練とか規律とかいうことは、唯この欲求を十分に満足させるための手段にすぎないと思うのです。

だからといってみなで集まってどこかに出かけて楽しめばそれでよいなどということではありません。唯決してこのことを忘れないようにしていつも行動してもらいたいのです。

はなはだ一般的になりすぎましたが、個々の行事については、それぞれの特殊な条件というものを加味して考えていただければ、一般的に離すだけでよいのではないかと思い、このようになってしまいました。

いづれにしても可能性に富んだ部として、今後ますます独自の発展を遂げるための基礎が出来たということは私も大変うれしく感じているところです。



かもしか

田上栄一

夜間登山のことを通例「かもしか」というそうだ。丹沢の大倉尾根を夜、登り、翌日は主脈をやろうと友人Sと二人で決めた。なにしろ僕らは、最近山へ行き出したばかりなので、かもしかに非常に興味を持った。大倉を登り始めたのが午前一時頃である。天気はすばらしく良い。登っているのは僕等二人で誰にも会わない。少し心細くなって来た。丹沢は僕が二度目で、Sは初めてだから無理もない。

「一人じゃちょっと登れないな」

「熊が出るぞ」

「じゃ、いのししが出るかもしれぬ」

「ことによると追いはぎが出るぞ」

「何に云ってるんだ。追いはぎは俺達だよ」

こんな会話をしながらのろ〃〃登っていると、後から一人登って来た。

「今晩は」

「今晩は」

お一人ですか。すごいなあ、僕等は一人じゃ心細くて登る気がしないなあ。丹沢山何回も登ってるんですか。」

「近いからしょっちゅう来るんだけれど、今晩はすいているね。いつもは、行列を作る位人が多いんだが。」

彼（東京新聞の記者）と一緒に三人で登り始めた。僕はほんの少ししか登らないうちに非常にバテた。何んだか解らない、おかしい。彼が腹が減っているんじゃないと云ったので、よく考えて見れば四時半に晩飯を食べてから何にも口にしていないのだ。そこで飯を食ったら、やっと楽

になった。途中で休んで腰をおろす。星が非常にきれいである。こんなに星があるのかとつくづく感じられた。涼しい夜風がヒンヤリと吹いてきてまことに気持がいい。夜登るのは良いもんだと思いながら登った。のろのろと登っていたので塔に着いたのは六時頃であった。予定より二時間も遅れた。塔で朝飯を食べていると、ねむくなって来たので一時間位寝てしまった。記者は塔から先に行った。

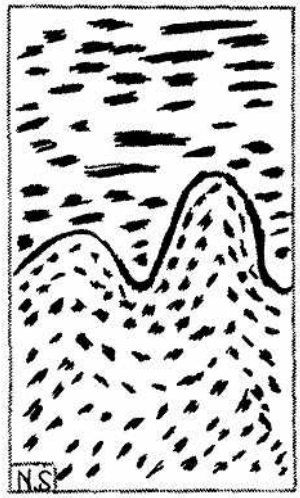
さて出かけようとした時、Sの水筒の栓が中に落ちて使えなくなってしまった。

「よわったなあ。暑くなりそうだぜ」

「まあしよがないや、丹沢へ行ってから考えようや。」

Sは非常に汗かきなので、喉が渇くのも早い。そこで塔でお茶を飲むは飲むはヤカン一杯位飲んだのには驚いた。丹沢に着いてから、蛭を往復して三峰へ行こかと相談したが、水が少ないからやめて、そのまま三峰へ行くことにした。三峰までは調子よく進んだがそれからが大変。七月の末だから薄日であったが暑いし、水は少ししかない。三十分おき位に水筒のふたに一杯づつ飲む有様であった。そしてやっと宮が瀬に着いた時は、水はほとんど残っていなかった。山登りの経験も浅かったので、今考えるとずい分滅茶苦茶なことをしたものだ。全体的に見てかもしかは夜登っている時は、非常にいいが、翌日、時に午後からが、つらい。

幹徳山黒金山紀行



非公式であったが、我々五名の部員は十一月一，二の両日を大変愉快な気持で過ごした。この秋の最もよい季節に美しい山行を味わい得た我々はその味わいを、皆にお分かち致したく全コースを五つに分け、クヂで選んで紀行文を分担して書いた。

（参加人員）五名　リーダー　田上
嘉納・望月・松本・石黒・田上

（登山記録）

新宿発	23.55	
塩山着	3、06	
〃 発	3、45	徒歩
武田信玄公廟	4、35	徒歩
一之橋停留所	5、57	徒歩
乾徳山登山口	6、10	徒歩
徳和着	6、40	朝食
〃 発	7、30	朝食
銀昌水	8、20	
錦昌水	8、50	
大平牧場発	9、30	
乾徳山着	10、40	昼食（半分）
〃 登	11、10	昼食（半分）
笠盛山	11、45	
〃 発	11、55	
黒金山	12、25	昼食（残り）
〃 発	13、10	昼食（残り）
大ダオ	13、30	昼寝
〃 発	14、00	昼寝
木村場	15、00	
登山口	15、15	
一週完了		

（1）出発から徳和まで――嘉納――

十一月一日二十時四十分、横浜駅で学割切符を買っていると肩をたたく人あり、部員の牧野氏なり。一緒に新宿までゆく、誰一人部員は来ていない。長野行きの行列は隣のホームにまで達する程、牧野氏がつき合ってくれるので有難い。二十二時十分五名全部そろう。

二十三時十分汽車来る。大いに走って一番前に席をしむ。全部一緒にすわれる。牧野氏帰る。彼に感謝す。汽車出発、私以外すべて寝たふりをする。（私は本を読むふりをする）座席は寝づらい。彼等床に新聞を敷きて寝る。途中　担ぎ屋風の男女乗り込む。その中の男が彼等の寝方を見ていたが寝方がわるいから場をとりすぎると　怒鳴りはじめる　「寝方もわからないんなら、俺がいいように並べてやろうか！」と車内中がふりむくほどの喧嘩腰、私は何も云わずに本を本を見つづけた。人に抗議するのに喧嘩みたいにしなければならぬ男に私は気の毒に思った。けれど彼等も寝場所をとりすぎていた。皆おとなしく男の云う通りにしたら通路が大きくあいた。しばらくして皆が寝込むと、男は私に「旅なれてないんですね」と云った。恐らくそう云わねば、彼のさっきの興奮の弁明にならなかったに違いない。しかし私は相手にならず黙ってうなづいた。そのうち望月氏が目を覚す。恋のはなし　彼は相手に自分を理解してもらいたいと云い、私は自分が理解されるなんて真平だと云った。彼は相手を求めるハンターなら私は釣糸をたれて待っている漁夫だ。「恋に関してだけは女の性質だ。さもなければお前は男として未成熟だ」彼は云った。彼と私とは正反対だ。

三時十分塩山につく。バスは七時まで出ない。しばらくバスの待合にいたが――全部で五十人位の登山客、女も多い。可憐型の美女あり、帰りのバスでも一緒になったと記憶する――つひに決して歩きはじめる。懐中電灯頼り、星が美

しい。冬の星座が見えるのだ。オリオン・シリウスの青白い光、空気がすずしくよい気持だ。恵林寺には四時三十五分、空が白むころから望月氏の一人舞台、四人さんざんに聞かされる。架空でもよいから恋人でも持っていないとこんな時無防備、二倍の汗をかく次第となる。以来彼は至るところで私達に聞せて下さる。

あけて来るとあんなに星があったのに薄雲が多い。道に添ふ流れは大きなもめこかな　岩に囲まれた壮観、人家の造りも独特の村で面白い。六時十分乾徳山登り口、ここから徳和まで超特急（朝食を食べたい一心）　徳和に休憩所あり。汗びっしょり、休みだしたらすごく寒い。ふるえる、しかも十円のお茶代を敬遠して、ブルブルで冷飯、冷水、「お茶いりませぬか」をことわって、しかも水をもらいにゆくけちな奴等は紙くづをもやして暖をとる。

（2）徳和から牧場を経て ― 望月 ―

いよいよ本当の登りとなる。乾徳山まで二時間半。爽やかな朝の空気に全員張り切って、一歩一歩と小路を刻みつける。夜間歩行では空腹のためシンガリをつとめた松本氏は朝食をすませてからは快調。「腹が減っては戦は出来ぬ」黙々と進む予定時間の半分程で銀昌水に到る。リーダーの田上氏の指示で水筒に水をつめる。登りは割合と急である。只下を見て足を踏みしめる。夜間歩行のためか疲れる。時折可愛いあの子の顔が頭に浮ぶ。（ガンバッテ！）（頭に来ちゃうな？）この辺りから乾徳山の岩場が雑木の間から見える。やがて視界が開けて銀昌水に着く。小休止、冷い水に各人喉を潤し息を入れる。

周囲の景観は問題なく美しい。右の方に一面の枯れたすすきの原で茶色のすすきが印象的、後方には富士がかすんで見える。左上方には銀灰色の岩場が緑の木々の上にそびえて青い空に照り映えている。（あの子に見せたい！）緩やかな登

りを楽にすすむ。高原の様な感じが深まる。柵が見えて牧場に出る。小屋があって中から五人の色男に声がかかる。それでは一休みするとしよう。牛乳が喉にしみてうまい。一人三十円づつとられてふところが軽くなった為か元気が良い。枯れた牧草と牛の踏跡をふみこえて登る。もうすすきの原は下の方である。山肌の緑が紅葉した黄色の木に縁どられて何んとも云えない。楽に登って尾根に出る。周りの景色に見とれて歩く。冷涼な風が髪をそよがせすずしい。アツー、帽子を忘れた。水場におきざり、取りにゆくのも面倒だ。負け惜みを云ってあきらめる。サアもう一息だ。

「附訳」心がけがよいので帽子はとどけてもらった。モウケ！！

「松本註」年中いつも、とくにこの山行では、いつも残り四人は当てられどほし。何と云っても彼氏でないといけないという人がいるのかな。途上　高校時代からの得恋、失恋の物語を聞かされる。いや幸福な御仁だ。

（3）乾徳山　　―松本―

開拓農協牧場より見た乾徳山（標高2020ｍ）の全貌はふと息を呑ませるものがある。巨大な岩が隆々とそこここに重なり合い、巨岩の銀灰色、白樺の白褐色、保安林の黄、紅葉の紅、常緑樹の緑と秋猛の色合い、コントラストは人を感動させずにはおかない。我々五人は秋山の美に浸りながら高原より乾徳へと登っていった。やがて岩場にかかり、ごつごつした巨岩連をはいつくばってよじ登る。途上石黒丹那、皆の後をついて来たのはよかったが、とんでもない岩場の方に回り道をして、足を踏みはずしそうになったり、まさに九死に一生を得た様な顔付で追いついて来たのは、まことに同氏のため、いや同氏の彼女のために喜びにたえない。くさりが二，三カ所あって岩登りを続ける。

或る鎖のところで、アベック連れの可

憐なる女性が思い切りがつかず、鎖の下で座り込む。非常やこの男だけ登って行ったと見るやさすがに五分もせずにもどって来たのはその心がけや殊勝なり。ワンゲルの男性諸君はもっとしっかりした女性をと強調したい。

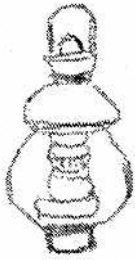
頂上より見た連峰は又格別にすばらしい。いつみても雲にそびえ、壮麗な三国一の富士、遠くに大菩薩峠峰、南ア・・・手前に大烏山など、しかも乾徳山同様今こそとばかり錦織の様なｌｅａｆ　ｐａｔｔｅｒｎ　をみせている。ふと雰囲気におされて下にとび込みたくなる、まことに乾徳の秋は言語に絶する。

(4)乾徳山から黒金山　　―田上―

乾徳山の岩場を過ぎると、奥秩父特有の幽玄極りない原生林中に突入する。展望は全く得られず、鋸目、時に落ちている飴の紙などに従いながら倒木を踏み越へ踏み越へ進む。全く気が滅入りそうで、さすがワンゲルの猛者連も大自然の静寂に圧迫されて黙々と歩くのみ。しかし道にふんわりと浮いた苔を越え大自然の息苦しい程の圧迫を感じながら進むコースは如何にも奥秩父ならではである。やがてぽっかりと開いた明るいピークに出る。これが笠盛山である。ここで一息入れて又原生林に入る。これから先は道もはっきりし、倒木も少なくなり楽しいワンダリングである(望月君は誰かと歩きたかったろう)やがて黒金山の肩につき、そこから五分で黒金山の頂上(2232ｍ)につく。頂上では霧がかかり景色は半分しか見えなかったが、国師岳、甲武信岳の景色はまことにすばらしい。ここで昼食をとる。寒かったので、火を焚く。誰かさん、焚き火した手でミカンを真っ黒にして、それでおいしそうに食べる(女の人には見せられない!)なほ頂上では非常に寒かったので、いろいろの物を食べてすぐ降りる。

(5)黒金より大ダオを経て　　―石黒―

黒金より下り一方となり途中はじめて熊笹あり、丹沢が思い出される。少時間の後、大ダオに着く。乾徳山への行程にて、あたりを見わたせば、折からの太陽の光に照らされた大ダオが見え、帰りの良き昼食場所と定めておいたのだが、午後から曇り寒さを増し期待がはずれる。それでもそこにて横になれば汽車にて寝られなかった疲れが出たのかうとうととした気持になる。大ダオの少し手前から一緒になった若い人からカラーフィルム一本をもらう。この気前のよさは十円のお茶をも飲まずに震える我々には到底足元にも及ぶところではない。少し行くと丸太踏みの木馬道となり非常に苦しむ。張り切りボーイの望月君がトップで走り出したので、次第にスピードが早くなり、つひには時速３０km程にもなる。バスの停留所につく頃雨がふり出す。例の茶屋で雨やどり、魅力ある女性がいて時々目を交す。バスに乗る「(嘉納註) バスの中で山よサヨナラご機嫌よろしうと望月氏と大声で歌った。今日一日山は私達に笑ってくれた。そして別れを惜しんで今また泣いてくれた」隣りのいとも純情そうな女性に魅了される。それにしてもバスガールは親切で都会のバスガールの機械的なのに対して人間味を感じさせられる（気が多いぞ！）景色もよかったし、計画も思う通りにいった。満足感に話もはずむ。途中「笹子餅」を買って食べたが最後に二個を三人で分ける珍案も出たが結局ヂャンケン、普段心がけの良いはずの某氏が食いはぐれる。車中談は初め上品な我等には聞くに耐えぬ下品な話から始まりつひに自殺者の心理分析と云う程の高級な心理学に達し熱が入る。新宿で解散する。



あら！ まだ早いわ

さとうふみを

君の今日の唇とっても美しいね
あら！　まだ早いわ

勿論僕の云った言葉ではありません。キスミーロ紅の宣伝文句なのです。

でも「美しい」って一体何なのでしょうね。美学や哲学や国語（言語）学や数学誰かさんのお得意のように生物学を入れてもかまいませんが　それぞれの先生は、それぞれに教えてくれるでしょう。しかし先生方はあくまでも自分の商売道具を使うでしょうから、誰をも納得させるというわけにはいかないでしょう。それなのに納得させようとするから、試験だなんてコワイものを振り上げるのでしょうね。

それはさておき、このことは人それぞれが、それぞれに解釈していていい問題だと思うのです。「あの人は美しい」って誰かが云っても、僕はそれに賛成しない場合がありますから。

それで僕は僕なりに「美しさ」をこのように考えています。

美とは我々にとって望ましいもの

アリストテレスの徳論のようですが、例えば、馬は早く走る　というのも美しさの一つなのです。

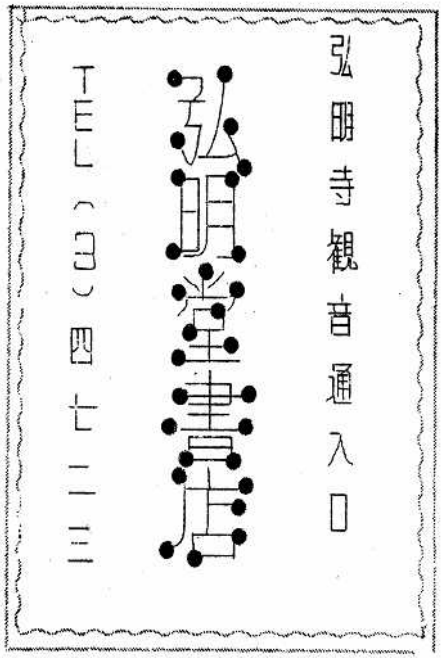
こういう点から　美しさ　を求めて行きましょう。

何も何も小さきものは、いとうつくし三つばかりなる乳児の、急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとく見つけて、いとをかしげなる指（および）に捉えて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳児の、目に髪のおほいたるを掻きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。

云うまでもなく枕草子からです。ここでいう　うつくし　は勿論　美し　ではなく可愛らしい　ということで　美し　のことは文にもあり　をかし　です。でも

うつくし　という語が現在では美の概念として私達の頭に浮かぶのは、この可愛らしさに、いかに美しさを見てきたかということがわかると思うのです。

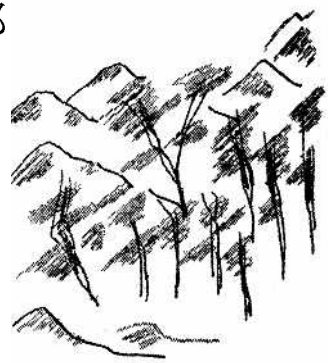
「美人ハ云ハネド隠レナシ」？　―続く―



大菩薩峠ハイキング

十一月二十二、二十三日

小野三郎



我々一行を乗せた列車が「塩山」に着く、汽車の外部は一面の暗黒が支配している。窓をあけると冷気が体にしみわたり、全身に緊張感がみなぎってくる様だ。

駅からバスに乗り三十分程行く、バスの終点から一般客とは道を別にして一寸先みえぬ闇の中を一本の懐中電灯をたよりに進む。足の下に踏まれた霜がさくさくと不気味な音をたてて寒気がヤッケの中にしのびこむ。

電灯をたよりに広い道路を進むうちにいつしか道はさびしい草の中の道へと変わって行く。冷気のために頭の心（）がばんばんと鳴り手足はこごえる。しだいに道はけわしさを増し電灯で照らされた地面は雪を思わせる程　霜で一面真っ白になっている。やがて河と道が交錯する地点にさしかかると男達は道路工夫に早がわり、私と同行の某氏が水をくみに道のわきに入っていったので私も共に河へおり　手をこごらせて水をくむ。再び道にもどる頃同行の某氏の友人である一＊＊が前を歩いているのに気がつき二人は歩を早める。

やがて道が分かれている処に至り我々三人は左手に歩を進める。が　しだいに道は不明となって来て遂には穴の中の如き処につきあたった。同時に某女に手をかす事は同行の某氏に申し分けがないとは思ったが上がるのに苦心している彼女をみると親切心が湧き起こって来て手をかす。なんとその手の堅かった事か！　穴から出ると広い道路に仲間達が数人立っており、あたりも明るさを増し右手の斜面が日々と浮かび上がっている。

リーダーの命令の下に右手の斜面をよじ登る。斜面をのぼる頃　あたりは明るさを一層増し　足下の木の葉が霜で白くなっているのがみえる。しばらく行った処で食事の支度にとりかかる。ぱらぱら音をたてて燃える木々から立ちのぼる煙があたりの寒気をやわらげ、火をかこむ我々の顔に赤味がさし始める。温い「みそ汁」に舌鼓をうつ喜びは何物にもまさる格別な物がある。かなたの山から昇太陽があたり一面を暗黒の世界から光明の世界へとまたたく間に変えて行く。太陽は新しき世代の象徴の如く燦然としてあたりを支配して行くのだ。

食後元気よく黒金山めざして勇み立って出発するのだ。次第に霜も消え山の温度は上昇する。単調な一本道がはるばると続き、倦きが来る。私は所有しているカンパンとアメをむやみと食べその退屈さをまぎらしていた。いつしか黒金山を過ぎ足を鶏冠山の方へ向ける。すでに相当登ったらしく足下にひろがる景色は無限のかなた迄続くかと思われる程ひろびろとあり人家が点々とみえ、かなたの山がはっきりとした輪郭を描いてそびえている。道は次第にけわしさを増し足はだるくなる。某女が黙々として疲れの色もなく登っていく、なんと自分がだらしなく感ぜられた事か！

鶏冠山が眼前にみえた時にはすでに数人の者が登ってすわっている。私は勇気を鼓舞して走り出す。頂上に登るとあたり一面が　みはらせてまるで絶海の孤島

の感がする。三米平方の頂きにかたまって「みかん」をたべる者、「リンゴ」を食べる者さまざまである。ただ皆に共通な気持はこの美しい自然に心を安めて少年の如き純粋な気持になっている事だ。真っ青な空にうかんだ白い雲その下にそびえる山々、はるか下手にみえる河が白い線をひいた様にかなたへ消えて行く。いつ迄もここをはなれたくない気持がする。しかし我々は次の目的に進まねばならないのだ。一同は歌を合唱してここを去る。

ああ山よ、我等の恋人よいつ迄もこの姿を変わらずに持ち続けておくれ！　そして我々が人間社会の戦いに疲れはてた時なぐさめを与えておくれ！

一同は惜別の情をふりきる様に道をもとの大菩薩にむかう地点に迄かけもどって行く。またしても続くえんえんたる登り下りの道が我々の感覚を鈍くする。やがて広々とした草原に出る。そこで後続部隊を待つ。前面には大菩薩嶺が横たわり左手には草原が続きそのむこうに富士の姿が絵からぬきでた如く浮かんでいる。草原を吹く涼しい風が快く顔をなぜて行く。一同大菩薩嶺にむかう。道はぐるぐると山ひだをめぐり寒気が一面に充ちわたる時、我が心境は机竜之介の如く静まり、あたりにその神経を働かす。だがなんとあわれな事に我々が足は自その意志にそむいて重くなり呼吸ははげしくなって来る。元気をつけん物と腰なるキャラメルをしゃぶる事二箱となり我が呼吸ますますはげしくなり、頭はじんじんし目はくらくら始める。ああ悲しき男性の運命如何に、あわれ男子（）は傍らの木にこしをかけ休息のやむなきにいたる。休息の後頂上に急ぐとなんと乙女が一人我より先に登っていたではないか。

食事の後一行中の二人別の道を通って大菩薩峠にむかう。我々は時間のなくなる事を気にしつつ進むとやがて一面がひろびろとした草原になった斜面に出る。一同明るい光をあびつつ斜面を走る。峠に

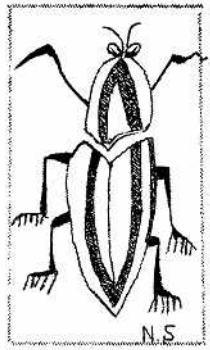
着くと一般コースから登って来た仲の良い二人連れが待っていた。一同その草原で写真をとる。記念写真撮影の後草原を急いで行くとかなたに先刻の二人が立って手を振っている。

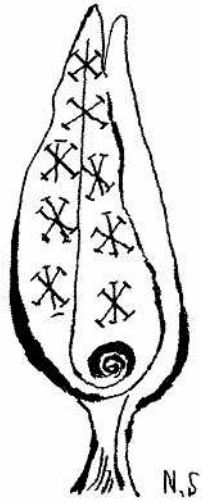
一同敵に追われる敗残兵の如く痛む足をけって坂を下る。ああ無斬にも私が着いた時には一滴のココアもなくなってしまっていた。その後草原の終る所迄一同そろって歩きそこから一途帰り道めざして下る。我と某氏は二人の女性に差をつけんものと元気よく岩だらけの道を出来るだけ近道して走るが追われる者の悲しさですぐに追いつかれる。"なにくそ"とつまらぬ虚栄心に心をふるい起こして走る。眼前の岩が私の眼をぐらつかせる。一瞬岩をとびこしたと思った時「があーん」と云う音と共に私の右足は痛みを感じた。ズボンをめくると赤い血がみえる。だが汝男子よ、女性の前でめぐるしき姿をするなかれ。傷は浅いぞ、しっかりせよ。又猛然と山道を下る。両側は高い壁をなして道が岩にさえぎられつつ永遠に続く。やがてすすきのみえる道になり河を横ぎる。この河で顔を洗っていると一行は先にいってしまっていた。バスの時間に間に合わんものと一同真剣になって走る。途中の茶店でサイダーを飲むひまもあらばこそ一目散に走る。走って走って走りくたびれた頃橋がみえ道はひろくなり平坦となる。道をわけて河に出て腹を水でひたす。一同に遅れてなるものかと又一目散に走る。あわれ我々はマラソンの練習にはるばる大菩薩まで来たのかと後悔された。そのマラソンもいつしか終りバスの終点に着き車上の人となる頃には今日一日の思ひ出がなつかしく温みを伴って睡気と共に私をおそう。

ああかくて一日の行程を終えて我は家路へと急ぐ。

サヨウナラ大菩薩峠よ。人の世のはかなきを嘲笑しつつ悠然と存続し続けておくれ。

ワンゲル雑感





河野　哲

我々は多くの友情の綱で結ばれた。心に太陽を、唇に歌をもって、この一年間を素晴らしい、より高い理想を培う日々へと育んだ。山の上で、渓谷のせせらぎの中で、そして数々の思い出をベニヤ板の壁とトタンの屋根に包んで、我々は友情をわかち合った。三人寄れば歌声、議論、賑やかな笑い声―我々に不満がなかったのではない。不満を打ち消して尚あまりある楽しさだったのだ。僕の人生の途上に於てまさに一個のエポックを画する一年間ではあった。

＊

ワンダーフォーゲルの連中は散歩が好きである。何かというと外人墓地とか山下公園、山渓園あたりまで足をのばして、マルクスをあげつらい、宗教を論じ、哲学に就てのお粗末な意見を吐き、恋愛を語りながらてくてくあるく。それでいて、授業に出る為に教室まで行くのをおっくうがる。

＊

ワンゲルの男女は大いに人を笑はせる。著名なるM君などは歌を歌いながらダンスと落語をやってのける。不思議な才能というより他にない。しかし、皆さん。皆さんは絶えることなく冗談を云い。哄笑を巻き起こし、自分でも笑っているが、その陰には充分に自信を持った知性がかくされているのです。おれは年中こんな毒にも薬にもならないことを云っているが本当のおれはもっと高いところを見ているのだぞという自負が感じられる。この自負の念がセンス・オヴ・ユーモアを生んでゆくのでなければ—いや、僕はたしかにそうだと信じる。信頼を裏切らないで下さい。

＊

我々は充分に親しく、語り合えば尽きるを知らず、一緒に遊んでも気詰まりな点は少しもないが何かひとつ欠けているものがある。ここという時になると戸をおろして殻に閉じこもってしまう。お互いに依然警戒心が残っているのだ。僕は悲観しているわけではなく、むしろこういった傾向を肯定しようというのだ。知り合って一年もたたないのに心の友が出来てたまるものか。自分の内面の醜さをさらけ出し、欠点を見せ合ってなおかつ信じあえる友達というものは一年やそこらの交際で出てくるわけがない。むしろ我々は自分の日常接触する人達を吟味検討し、互いに相手の長短を充分に見極めるべきだ。その上で真の友を選ぶ。またそれだけの土台があれば必ず心からの友情が生まれてくる。苦しみを打ち明け、共に悲しみ、歓びをわかちあう友達が出来ると僕は信じている。現在は準備の期間である。既に我々は充分に語り合った。お互いの長所短所はほとんど知りつくした。だがまだ解決しなければならない問題は多い。それらの問題が完全に検討をしつくされた上でうちたてられる友情は強力なものであろうと信ずる。

小野三郎

小田急線の心地よい振動に誘われ、睡気が私の体を占領し始める。意識が多少朦朧と成る頃、電車は朝の冷気をさいて大秦野の駅に滑り込む。出口から吐き出された登山客の群は、町の靄の中に溶込んで行く。バスの停留所で同行の五人の者に逢う。私も混ぜ一行六人、中一人は女性、髪を両方に分けて結び朝の冷気に多少顔を白くして立っている姿は、靄と合致して神代の乙女の姿をここに再現したかと思われる感じがする。やがて三十分程バスにゆられ山の麓の村に着く。六人わ一列となり石の多いゆるやかな小路を静かに話ながら歩く。左手を流れる渓流の音が恋のささやきにもにた快感を与えてくれる。道はくねり傾斜も増す頃、下手から赤々とした太陽が姿を現す。渓流が白い湯気を立てて流れて行く。草の生えた山道を登る頃、私の足はほてり始め、痒さがひろがる。ヤビツ峠にさしかかると道は開け青空がスクリーンの様に眼前にひろがり、かくて我等の丹沢登山記の一幕は幕を切って落とす。広い道路に出合う所に一本の遭難碑がある。「某年某月某日＊＊君、飢えと寒さの為ここに倒る」ああ無斬にも天地創造の神は一個の人間の生命を空腹により奪ったのだ。大山を右手にながめつつバス道路を軽くハイキング。やがて橋を渡り一軒の小屋の前で休み水筒に水を充す。ここから道は本格的にけわしい山道にさしかかる。木立が少なくなり草も親父の頭の如くなり遂に岩と砂利の多い道となるにつれ私の呼吸も次第に速くなる。わずかに残っている草につかまり下を向いて登る。足は重さをまし次第にだるくなる。一歩ごとに地

球の重力の偉大さを痛感させられながら一歩一歩踏みしめて登る。やがて草木一つない視界のひらけた所に来ると冷たい風が疲れを奪っていってくれ、「登って来てよかった」という喜びが全身から湧く。はるか下迄つづく砂利の斜面は雪山の斜面の如く一直線になに物にも邪魔されずに続いている。やがて道は増々けわしさを増し、完全な岩と砂利だけの道となる。六人話す力もなく黙々と登る。最も急な斜面にさしかかる頃、私は立ち止まってしまいたい程の疲れを感じた。この時健脚なK氏が私の傍を通り越して行く。「なにくそ」という気持が生じ私の足は速度を増してくる。二の塔に着く頃から道は馬の背の如くとなり、岩だけからなる壮年期の山らしく一本長く頂上を連らねてかなたの峰まで続いている。三角形の頂点の如き道の上を歩いて行くと両側の景色が眼をくらませる。三の塔を過ぎると道は多少けわしさを減じ、気がゆるむせいか食欲が頭をもたげ、斜面を登るたびに足がふらつく。塔が岳を眼前にみつつ風に吹かれながら食べる食事のなんとうまい事か。一気に塔が岳に達した時の気持はまるで未知の山を征服した時の喜びの如き感がする。頂上に立っている二軒の小屋と尊仏堂が雲をかぶり、先刻よりどんよりとして来た空の下に、崩壊を前にしたアッシャー家の如く立っている。塔が岳よりK氏別の道を通って帰る。残った五人はゆるやかな道を通って今夜のねぐら丹沢山頂の小屋へと走る。楽しい夕食の後寝床につく。夜中頃到着する人々の騒音や同宿の新婚らしい二人連れにあてつけに語る山小屋の親父の猥談が聞こえる。露骨な親父の猥談も自然の懐に溶け込み、都会で聞く程の不潔感を起こさせないのも又面白い。翌朝冷涼な空気の中を目的に向かって進む途中、行き逢う人々の朝の挨拶が人間愛の美しさを感じさせる。朝露にぬれ朝日を受けて輝く草に足をぬらしながら幾つもの峰を越えて行くと歌でも歌いたい様な気持になる。

三十分の休憩の後予定の蛭が岳に向かって全力をあげて進む。着いてみると蛭が岳は切りひらかれた明るい土地である。昼食のカンズメに舌づつみを打ちながら楽しい団欒の時をすごす。三三五五楽しく食事をしていると早くも帰りたい気持が湧いてくる。帰り道は石棚めざして進む。秋の武蔵野にも似た林の道を枯れ葉をふみながら進むと自然心は静まりある厳粛な気持になる。道は下り坂となり石がごろごろして歩きにくくなって来る。両側の笹が道をふさぎ始め、道を誤ったのではないかと思われて来る。不安の気持と未知の世界をある時の勇気とが交り私の心を動揺させる。水のない河にも似た物にそって歩いて行くうちに川の音が聞こえて来た。我々は喜びに心をはずませ小学生の様に走った。いつのまにか石棚を越えずにそのまわりをまわって来てしまったらしい。川の処で有りっ丈の食料を出して水をのみながら食べる五人の姿は夕方近い、くらくなり始めた山々の内で人間の存在を強調するがの如く宇宙の中に一つのストレスを与えている。やがて川にそった細い道を丹沢山塊を左手にながめつつ丹沢山に離別の情をおしみつつ進むうちに道は河原におりる。河の中に点在する岩の上を歩いて行くうち吊橋にさしかかる。その長さ約三十米、針金で作っただけのそまつな橋は五人が歩いて行くにつれ断末魔の如きうめき声あげる。同行の女性が泣きたそうな悲鳴をあげる。ああやはり彼女も一個のやさしい女性であったのだ。橋をわたりおえた所の立て札に曰く「この橋は危険ですから一人づつ渡って下さい」〃運命の神はよくぞ親不孝な五人の者を河の藻屑にする事なく助けたまいし事よ！　〃道はひろびろとした大道路となり遠々と神縄から谷峨迄続く夕やみせまる道を元気よく進む。我々は楽しい二日間の思い出にひたりながら足の痛さも忘れバスにも乗らず進み、ついに暗闇の中を谷峨の駅についた。

丹沢主脈縦走記

嘉納秀明

前日私は寝られなかった。少なくとも最近の山行きではそんなことはなかった。と云うよりも私は山に行く前日になると大抵行くのがいやになって明日は雨になるとよいとまで考えるのだった。けれど今度は全然ちがっていた。中学や高等学校の頃の様にあの山肌が私に迫って来て私をねかさなかった。朝になっても早くから目が覚め　そして又山の幻だった。五時頃になってやっとねたらしい。

七時起床、七時三十八分茅ヶ崎発。装備は前夜すべて整えたし、いつもの習慣で自分の室は全部きれいにしておいた。電車の中は丹沢行きの登山者が四名もいた。平塚のバスのところでは十名に達した。秦野発八時三十分のバス、登山客多し、女の比率又高し。天気良好。外をみていると山々が見えて来て何故かひとり楽しかった。一人で山に登り、二日間も一人ですごすことについての快感もあった。

バスが遅延して九時十分簑毛。キャラメル一箱を買ってすぐ登り出す。他の大部分の人々はそこで一休みしているので、私が先発、調子をくずすまいとピッチを徐々にあげる。途中あまり沢山な派手の身なりの若者が下って来るので、山の中でヤクザの会合でもあったのかと思ったら、明日の元日を町で送るべく出て来た札掛部落の人達らしい。大山への

登口が不明で友人と二人で昨年は諸戸まで行ってしまったことを思い出し、林道をそれないで、まっすぐ登ってみた。登り切ると金比羅尾根と合っており、下にヤビツ山荘がみえた。私は了解した。

今年の元日も来たのだがその時も今日の様な好天気であった。しかも風が少しもない。雲が見当たらないのだ。登山口にて水をつめる。冷水うまし。出だし上々。調子よし。空澄みて展望よろし。

三の塔十一時二十分着。江ノ島、城ヶ島、東京湾、房総半島、大島（煙が立っている）、初島、伊豆の山々、とりわけ富士よし。相模川のうねりも明瞭。三の塔の小屋は完成間近か。三の塔までに大抵の人を抜いて道には人影なし。行者が岳には十一時五十五分、食事。南側の岩に腰をかけていると、とてもあたたかい。三の塔と大山がよく見える。ここにてしばらくスケッチ。

行者ヶ岳を立つと、ますます佳境に入る。紺碧の空、それも強く濃い空，黄土色の土、鋭いもの，この対象，この色彩，これこそ私の求めていたものであった。私の求めていたもののすべての象徴であった。私は酔えるがごとくに歩いた。私は恍惚のうちに歩いた。あらゆるものは私から消え去った。ただこの青空であった。そしてその対照の鋭さであった。私はキラキラしたものを感じた。裂けるようにチカチカしたものを感じた。私は胸の中から沸き上がる歓喜をもって、青空よと叫びたかった。「青空よ！汝かく我に近きや」と．私は空に浮いたように陶酔した．狂おしいほど私はとらえたかった．それは激情であった。私のすべてを網羅し尽くすべき激情であった．私は何か芸術への衝動を感じた。

塔が岳につくと感動の波は静まった。汗が冷えて寒く、すぐ尊仏小屋に入った。ここで泊まってみようかと思ったのだ。けれど、毎年夕方ごろから戦争のような騒ぎになると聞かされて，丹沢にゆくことにした。丹沢までの間は競争した

ので何も考えなかった。私のすぐ前を行く登山靴がわりに早いので、すぐ後をついて行くと、足音でそれと知ってか彼はピッチを上げた。私はついていった。スピードに次第に形加わった。ぴたりとについて行くと私を妙に調子が出てきた。私は一気に追い越すと、彼を意識してどんどん歩いた。前に来たどの時よりも短く感じられた。

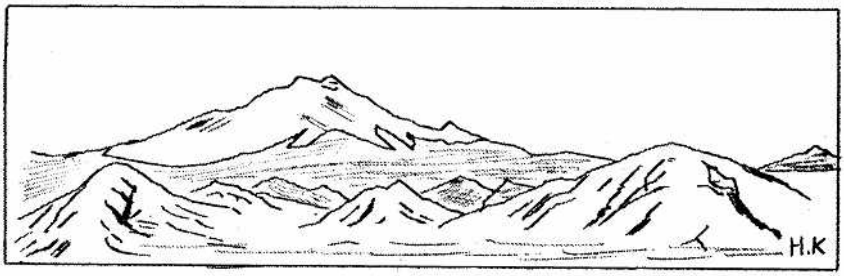
丹沢の小屋はすいていた．２階のストーブの丁度上に当たるところ、前に学校の人々と一緒に来たのとまるで同じところに座を占める。ストーブの端に行って、汗でびっしょりになった衣類を全部脱いで乾かした。外に出てスケッチは始めたが空気が冷たくなって風も少し出てきた。いやになったので途中でやめてしまった。小屋に戻ると5人もどこかののあんちゃん風のが私の所に座を占めているので文句をつけたら、その内に彼らと等しくなってしまって，水もらった。醤油ももらった。砂糖もわけてくれた。私はコーヒーを沸かして彼らにすすめた。

夕方近くなると客がたて込んで見る見る満員となってしまった。向かい合って立てひざで夜を過ごさねばならぬ。リックは皆外に出した。彼らがもってしたウイスキーとぶどう酒ので暖をとることにした。ジャンパーもヤッケもつけたままである。「先輩からどうぞ」と私は彼らから先輩扱い、随分と飲まされた。大げさな話しなどして、私はこの混んでいる泊りがあまりが不満ではなかった。

明朝は雑煮をゆっくりつくろう。持って来た「おせち料理」で元旦を祝おう、それにしても来年はソバを持って来て年越ソバとシャレようと食べ物の事を考へたりして愉快だった。

外はバリバリと音をたてんばかりにすべてが凍っていた。水筒の水はたちまち凍った。空気は刃物の様な固い壁となった。私はいつか人間のぬくみに寝込んでしまった。

元日は三時頃に早立ちの人々がいた。



あの五人も四時には、にぎやかにあいさつして出て行った。その中に娘達を大声でからかう奴がいて、私まで同類に思われそうでいやだったので、その点ではほっとしたし、寝場所が広くなった。六時にもなると、大部分の人が外に出てタキ火を囲んでリズムのよい合唱をやっていた。日の出にそなえて三脚をつけたキャメラが沢山並んでいた。太平洋上に厚い雲があるのか、それが真っ黒の山脈の様にも見えて、不案内な女の子が何とか連山と間違えたと云って大笑いしている。その擬連山の峯から太陽は、一九五八年最初の太陽は誕生した。平地の奴の話では、茅ヶ崎の浜でみると太陽が江ノ島の上から出たと云う。山の上では、江ノ島なんか貝殻みたいでつい眼の下にあったさ。

日の出を見終わる頃には小屋はガランだ。怠け者とか、寝正月気分の奴が寝ころんでいる。雑煮をつくる。横にいた人と分け合ったら、ウィスキーをふるまってくれ、ミカンを十個も頂く、予定より早く小屋を出た。

不動が峯の西側はすばらしかった。風景絶佳、昨日の天気と同様の快晴、富士、南アルプス、八ヶ岳、雪の連山、近くは桧洞、パノラマ雄大、スケッチするのも時間の制約を惜しむ。蛭が岳の途中一少年と一緒になる。行き先が一緒なので同行することにする。だいたい私は知らない人と軽いおつき合いをするのが大好きである。

私はその様な表面的な交際ほど気分のよいものはないと思う。山で一緒になると互いに何も判らない、互いに他人の心の中に入ることはない、それで気分がよいのだ。それに何となく、このやはり一人であるいている（塔で友人が疲れて帰ったのだと云う）少年に親しさを感じたから。蛭が岳からの眺めは一部木立の妨げもあるが伊豆七島、玄倉の谷などがよく見えた。この少年もスケッチをするペン画である。

蛭から案外近くに原小屋があり水場も近い　この小屋からすぐ姫次である。落葉松の疎林あるある草原・原小屋のけむりのどか。

青根への分岐のところで丁度十二時、二人で食事をする。青根方面の川添の部落がよく見える。話をするとこの少年、詩も和歌もやり絵をかくのが趣味で、横浜の工業学校に通っているなどと云ひだした。人間は少し親しくなると自分の性格のことなど人に話すから妙だ。ここからはだらだら下り一方である。もう山はきのうの様ではなかった。それは牧歌であった。東洋風であった。のどかであった。老人であった。老子であった。仙人であった。きのうの様に鋭くはなかった。つき放すところがなかった。確かにきのうも今日もそれは一つの神秘であり謎であった。しかし前者はつき放した、冷たい神秘だった。それは探求の神秘だった。後者こそは温かい人間味のある神秘であった。それは探求の神秘であるよりは、人間が探求などと云う事をやめてその中にとけ込んでゆく、東洋の神秘だった。それは共に深淵であった。私の心をわきたたせ感動させ夢中にさせるよりは、私の心を穏やかにし、安らぎを与え、ねむりに誘う様なくつろぎをそなえた風景だった。

道の車輪のへこみの氷は二センチ以上の厚みだった。二人で割って食べた。霜柱も食べた。笹の葉の上に大きく結晶している霜も食べた。残雪も食べた。何

もかも冷たいものはみな食べた。
平戸の林道を行くと杉の疎林の中に小さな流れがあってきれいな石の間で淀んでいた。北欧風の人気のない一軒の洋館がこの林の中にあり、この流れのほとりを静かに貴婦人が通るのかとさえ思われた。
林を出ると草原に昼月がみえた。草原・青空・昼月（それも淡い）は昨日を思い出させ私は軽い興奮を覚えた。
鳥屋につくと十四時発のバスが今出たところと云われた。十六時三十分まで何もないのである。私達は車をとめることにした。大胆にやって三台目の小型トラックに乗せてもらった。丁度来合わせたもう一人の登山客と三人で、厚木まで、風を切って車は超スピードだ　その中でもたれながら私は昼月と青空を眺めていた。

一月二十日記

ワンダーフォーゲル
３３年度役員

部長	—	吉田光志	経２年
副部長	—	嘉納秀明	工２年
副部長	—	鈴木直美	学２年
企画	—	田上栄一	経２年
企画	—	望月元雄	経２年
企画	—	柏木　寛	学２年
連絡係	—	河野　哲	経２年
渉外係	—	小野三郎	経２年
会計係	—	磯崎節子	学２年

（立野の役員はこの他に選ぶ）

あなたの
カメラのうまん
わたしの
野毛電車通り Phone③ 5349,2904

原稿募集

- 締切り　六月二十日
- 紀行文・随筆
- 詩・創作・歌等文芸作品
- アンケート「ワンダーホーゲル部は如何にあるべきか」お座なりの文でなく、研究考案の上、多数投稿されたい（四〇〇字以内）
- 新入部員の部に対する感想その他

各種メーカー毛糸
高級ボタン、レース
手芸糸類

大島屋

元町店 (2) 8514
吉田町店 (8) 5535

編集後記

★まず、四つに分散してしまう部の前途に対して本機関誌があらゆる意味に於ける、統一的な絆であることを期待する。

★発行がずい分と遅れてしまった。編集者が、関西旅行などするからだ。しかし二号には、その紀行文を寄せて、埋め合わせをつける。

★遅れた理由のもう一つは原稿が遅れたことで、丹沢集中登山は一部分の原稿しか来ないので、割愛の止むなきに至った。　カットは編集者の他に、鈴木直美さんに御協力願った。

★原稿整理は、磯崎さん、加藤さん、山上さんにお手伝ひ願った。

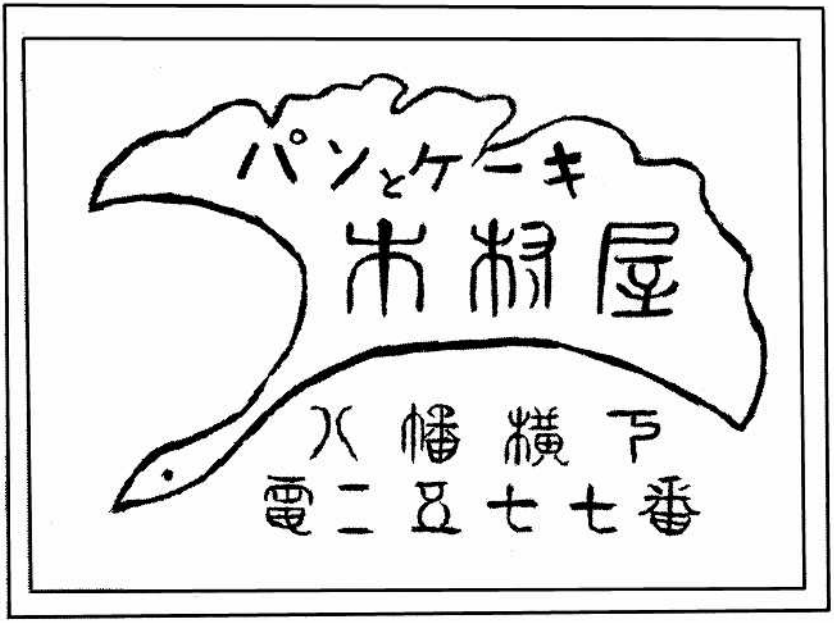
★最後に、私達のために非常に御尽力戴いた、印刷の山口氏にお礼申し上げる。

ＳＫＹＬＩＮＥ
創刊号

昭和３３年４月２０日印刷
昭和３３年４月２２日発行

編集責任者
嘉納秀明

発　行　所
横浜国大ワンダーフォーゲル編集部


パンとケーキ
米村屋
八幡横丁
電二五七七番

お酒と
食料品の
御用は
若林酒店
雪の下 法戒寺前
電話 365番

昭和三十三年四月三九日印刷
昭和三十三年五月一日発行

創刊号

¥30円